

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	馬場 訓子
2. 審査委員	主査：(岡山大学 教授) 高橋 敏之 副主査：(兵庫教育大学 教授) 名須川知子 委員：(鳴門教育大学 教授) 田村 隆宏 委員：(岡山大学 教授) 尾上 雅信 委員：(岡山大学 教授) 西山 修
3. 論文題目	幼稚園教育におけるティーム保育の実践と教師の専門職性
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 馬場訓子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成31年2月11日（月・祝）13時00分～13時20分</p> <p>場所：岡山大学教育学部東棟3階1308室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 幼稚園教育におけるティーム保育に関する諸問題と研究上の課題</p> <p>第1節 研究の背景と問題提起</p> <p>第2節 幼稚園教育におけるティーム保育に関する先行研究概観</p> <p>第3節 本論の構成と用語の整理と表記の統一</p> <p>第2章 幼稚園の現場におけるティーム保育の様々な実態</p> <p>第1節 幼稚園の現場におけるティーム保育の広がり</p> <p>第2節 現場教師から見たティーム保育のキーワードの抽出</p> <p>第3章 幼稚園の現場における様々なティーム保育の実践</p> <p>第1節 保育実践におけるティーム保育の形態と教育効果</p> <p>第2節 ティーム保育の多様な形態に見る望ましい運営方法</p> <p>第3節 ティーム保育の円滑な運営のための有効な施策と園長の重要性</p> <p>第4章 ティーム保育に見る教師の協働性と若手教師の育成</p> <p>第1節 協働性のキーワードの抽出</p> <p>第2節 教師間の共通理解に関する項目の抽出</p> <p>第3節 教師間の共通理解</p> <p>第4節 ティーム保育における若手教師の育成</p> <p>第5章 ティーム保育の教育効果と教師の専門職性</p> <p>第1節 ティーム保育に見る幼児に対する教育効果や影響</p> <p>第2節 ティーム保育の実践から見た教師の専門職性</p> <p>引用文献一覧</p>

1877(明治10)年、日本で初めて開設された東京女子師範学校附属幼稚園の『東京女子師範学校附属幼稚園規則』を始まりとして、年齢別の学級制が幼稚園教育の基本とされ、1人の教師が1学級を担当する「一学級一人担任制」が一般化されてきた。しかし、社会や子育て環境の変化に伴い多様な保育ニーズが認められ、幼稚園全体の協力体制の向上や、きめの細かい指導の工夫が要求されるようになったこと等を背景として、1999(平成11年)の『幼稚園教育要領』にはチーム保育という用語が登場し、幼稚園教育におけるチーム保育の導入が推奨されるに至った。現在まで、幼稚園の現場では多様なチーム保育が実践されるようになったが、一方で学術研究においては、各地の幼稚園現場で実際に行われている多様なチーム保育の実態が把握されていない現状があると共に、幼稚園現場の教師から捉えたチーム保育がどのようなものであるかという研究の蓄積が不十分であった。そこで、幼稚園現場におけるチーム保育の現状の把握や、現場教師から見たチーム保育のための諸条件を明らかにする必要があるという課題が認められる。そこで本論では、チーム保育に関する先行研究の整理、及び幼稚園の現場教師もしくは現場経験者から得たデータを基に、チーム保育の実践と今後の課題を明らかにし、望ましいチーム保育の在り方を考察することを目的とした。

第1章では、第1節及び第2節において、[1]幼稚園現場におけるチーム保育の広がり、[2]保育実践におけるチーム保育の形態、[3]チーム保育が幼児に与える教育効果や影響、[4]チーム保育の実践における教師間の協働性、の観点から先行研究を概観し、今後の課題を整理した。また、第3節では、それらの学術的課題を本論において解決する上で、広くチーム保育の実践者から得たデータから接近することを示した。具体的には、幼稚園16園から得た質問紙調査(予備調査)のデータ、幼稚園160園から得た質問紙調査(本調査)のデータ、幼稚園の現場経験者に対するインタビュー調査やグループディスカッションのデータ、及びチーム保育を実践する園の現職教師に対するインタビュー調査のデータから考察を進めることを示した。

第2章では、第1節において、160園の幼稚園から得たデータからチーム保育が広く普及しつつある現状を明らかにし、本論が示す内容が幼稚園の現場に広く資することを説明した。第2節では、幼稚園の現場教師から見たチーム保育のキーワードについて4項目を特定し、それらの大部分が第1章で示した先行研究の精査に基づく学術的課題と合致することを示し、本論の着眼点となる学術的課題について現場教師の語りからも焦点化・共有化を行った。

第3章では、幼稚園現場の様々なチーム保育の実践内容について取り上げた。第1節では、多様なチーム保育の形態の収集と分類から、10のチーム保育の形態を明らかにし、各形態に見る特性や教師にとっての利点や教育効果を明らかにした。第2節では、第1節で示したチーム保育の10形態それぞれに関して、陥りやすい問題点及び望ましい運営方法を論じた。第3節では、チーム保育の円滑な運営に求められる園長による取り組みや、園長のリーダーシップの重要性を明らかにした。

第4章では、チーム保育に見る教師の協働性と若手教師の育成に焦点を当てた。第1節では、幼稚園の現場教師から見たチーム保育の協働性に関するキーワードについて6項目を特定し、チーム保育を実践する上で教師間の協働関係を成立させる要素について論じた。第2節では、第1節で特定した協働性の6項目のうち、現場教師が最も着目する内容である「教師間の共通理解」に着目し、共通理解の具体的内容として15項目を特定した。第3節では、第2節で示した共通理解の15項目について、チーム保育の実践者の立場から見た各項目に対する意識の高低や重み付けを明らかにした。また、教師間の共通理解の因子構造を示すと共に教師の類型化を試み、3つの教師群におけるチーム保育の経験度や他教師との協働力について論じた。第4節では、チーム保育が持つ若手育成機能について、熟練教師と若手教師の関係性に焦点を当てながら論じ、若手教師が成長する上でのチーム保育の利点や熟練教師による若手教師の望ましい教育について明らかにした。

第5章では、第1節において、チーム保育に見る幼児に対する教育効果や影響について、現場教師から得たデータから4項目を特定しつつ各項目について論じた。第2節では、第1章から第5章第1節までの研究成果を基に、チーム保育における教師の専門職性において重要視される内容を論じた。また、チーム保育の今後の課題を示すと共に展望を述べた。

2. 審査経過

本論の主要部分は、3編の査読付き学術論文として、『教育実践学論集』（連合学校教育学研究科論文集2013・2015）、全国学会誌である『学校教育研究』（日本学校教育学会誌2016）に、共著論文の第一著者として掲載されている。これらの研究成果と内容についての審査を踏まえ、5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下の通りである。

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

本論は、幼稚園教育におけるチーム保育について、実践者である教師の認識や考え方を解明し、望ましいチーム保育の実践に関する有用な知見の提供を目的としている。そこで論文構成は、チーム保育の形態や教師間の協働性等の学術的課題ごとに、現場教師に対する質問紙調査やインタビュー調査、幼稚園の現場経験者に対するインタビュー調査やグループディスカッションのデータを基に実証的に検討されており、研究目的に整合する妥当な論文構成であると認められる。

(2) 先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

本論は、先行研究の不足部分である領域を埋める研究と言える。先行研究の概観では、幼稚園教育におけるチーム保育の変遷や、日本各地から報告されているチーム保育の実践内容に関する論考を整理した上で、本論の位置づけと研究意義を示している。考察では、先行の研究資料を用いながら、得られた成果と保育における寄与について論考している。よって、研究資料の質・量、扱い方ともに、学位論文の水準にあると判断できる。

(3) 分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

分析、考察ともに総じて、主観的恣意的な記述を排除し、科学的な解釈や論理的な文章表現を行うおうとする配慮が認められる。分析では、階層的クラスター分析や分散分析等の解析手法も活用しながら、客観的な分析に努め、研究の妥当性や信頼性を高めている。また、考察では、筋道を立てて論考を進めており、得られた結果から納得がいく合理的な結論を導くことができている。分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について担保できていると言える。

(4) 教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

今まで断片的な論考にとどまっていたチーム保育に関する先行研究を総括しながら、現場教師の認識や意識に関するデータを広く収集し、実践的な立場から幼稚園現場でのチーム保育の実態を明らかにできている。特に、1県内の多くの幼稚園に対する質問紙調査によって得られたデータを基に、統計的な観点を含めて量的に分析・考察を展開した部分について、本分野における量的研究の不足を補うという価値を見出せると共に、今後の研究の発展が期待されると言える。

(5) 学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

本論は、教育実践に直結するチーム保育の実践に関して、日々の保育を行う幼稚園の現場教師から得たデータや管理職である園長経験者から得たデータに基づき、実践者の視点に立って保育実践上の様々な課題に焦点を当てながら考察を進めた。チーム保育を保育に取り入れる試みは、社会的な保育需要に応えつつ望ましい幼稚園教育の在り方を追求する上で、今後さらに注目を集める分野であると考えられ、その点で教育実践学への貢献を大いに見出すことができると言える。

3. 審査結果

以上により本審査委員会は、馬場訓子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。